

「木戸・ノーマン史観」への疑義（鳥居民『近衛文麿』）

大東亜戦争の開戦へと至る過程を振り返るとき、やりきれぬ気持ちに襲はれる。米国と交渉を成立させるチャンスは何度もあつたかと思はれるのに、なぜ敗北必至の戦争に突入したのか？

このやうな疑問を背景に、様々な観点から議論が繰り広げられてきた。

例へば、丸山眞男は、敗戦直後の一九四六年に「超国家主義の論理と心理」を書き、ナチス・ドイツの指導者に比して、軍国日本の指導者たちに「主体的責任意識」が欠けてゐたと指摘した。だが、責任を感じた指導者の一部は自裁といふ選択をしてをり、全員が無責任だつたと論難することはできない。

また、平泉澄は、『日本の悲劇と理想』（一九七七年）の中で、米国側の戦争意思を強調してゐる。米国は、日露戦争中から対日戦のシミュレーションを続けてをり、一九四〇年秋からは開戦を想定した動きが目立ち始めた。けれども、あくまで日本側が戦争回避の姿勢を取り続けたなら、結果は異なつてゐたのではないかといふ疑念を払拭することは出来ぬ。

いづれにせよ、どうして戦争以外の途を選ぶことができなかつたのか、その意味で「主体的責任意識」の欠如を指弾されねはならぬのは誰だつたのか——これが問題となつてくる。

これまで、その責は陸軍と近衛文麿に帰せられてきた。無謀にも対米戦を主張する陸軍を抑へることが、首相たる近衛には（できたはずなのに）できなかつたといふ理解が定着してゐる。

しかしながら、その図式は果たして正しいのか。鳥居氏は、史料を博捜する中で、全く別の結論にたどり着く。「戦争開始の真の責任者」は木戸幸一であつたにもかかはらず、木戸は生き残るために真実をねじ曲げ、姪の夫であつた都留重人を通じて、（マッカーサー司令部の対敵諜報局に所属し、戦犯のリストアップに関はつたと見られる）E・H・ノーマンに近衛を「売った」といふものだ。そして、鳥居氏は、先に述べた通説——「木戸・ノーマン史観」によつて隠蔽された「真実」を描き出さうとする。

一九三六年に起こつた二・二六事件に際して、青年将校達に叛乱軍の汚名を着せて鎮圧する方針を立てたのは、内大臣秘書官長であつた木戸であつた。この結果、陸軍では、青年将校達に同情的だつた皇道派が力を失ひ、統制派が実権を握つた。これに対して、近衛は対ソ防衛を最重要視する皇道派に好意的で、翌年六月の首相就任後、事件関係者の大赦を説くが、西園寺公望や木戸など（宮中や（事件で関係者が狙はれた）海軍の反対を受け、断念してゐる。

全ては、そこから始まつた。近衛は、対米戦を回避すべく、支那大陸からの撤兵を目指したが、陸軍が反対したことはよく知られてゐる。陸軍を説得する唯一の方法は、昭和天皇から優詔を賜ふことであつたが、木戸は天皇を「常時補弼」する内大臣の地位にありながら、天皇に助言をしなかつた。何故なら、支那からの撤兵を実現することは、現在の路線を否定することとなり、皇道派の復活、ひいては自己の失脚に繋がるからだ。

鳥居氏も認めてゐるが、それは推測に過ぎない。死の前に「黙」といふ字を書き続けた近衛は、何も語らぬまま自裁したし、木戸の日記にも証拠となる記述はない。しかし、これまでの如何なる実証的論文よりも説得的であつた。本書を契機に、「木戸・ノーマン史観」の再検討が進むことを期待したい。